

# 中島敦「山月記」論——「欠ける所」についての考察——

吉村 久夫

## 一、はじめに

「山月記」の中で、虎となつた李徴から詩の伝録を依頼され、叢中より朗々と響く凡そ三十篇の詩を部下に書きとらせた旧友の袁修は、一読して作者の非凡を思わせる詩の数々に感嘆しながらも漠然と次のように感じる。「成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、この儘では、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか」と。この「欠ける所」が何であるかについて、その答えが「山月記」に明示されておらず、李徴の詩が袁修によつて絶讃といつてもいいほどの評価を与えられながら、その中に何らかの欠陥を含むような感じられ方をする不明瞭な書き方となつてゐるため、多くの議論を呼ぶことになつた。

この問題は、鷲只雄氏や門倉正二氏が諸説のまとめを行つた（註①）後も、多数の「山月記」研究者が避けて通れぬ問題として言及しながら、今に至るまで解決されてゐない。また、その「欠ける所」が極めて曖昧な提出のされ方をしている理由についても、未だ明らかにされてはいないのである。

「欠ける所」とは何かの問題が容易に見えない原因が、各論者が李徴と袁修を作品の設定どおり別人格と見ていることにあると考える私は、袁修をもう一人の李徴と捉え、「山月記」という作品を李徴の語りを中心としたモノローグと見ることによつてこの問題の解決を試みようと思う。諸説の中

には、作品の中に「欠ける所」の答えは存在しないのだという意見があるが、本当にそうなのだろうか。それとも、謎かけのようにしながら中島はその答えをどこかで示しているのであるうか。もし、作品内に答えを見出し得ないとするれば、中島は答えのない問いを創り出したことになり、この作品の完成度は大きく損なわれることになる。私は、「欠ける所」の答えは作品内にしつかりと用意されているという仮定のもとに、この論考においてその追究を行い、同時に曖昧さの原因も明らかにしたい。この問題の解明が作品理解の根幹にふれるものと考ええるからである。

## 二、「欠ける所」についての諸説およびそれに対する私見

「欠ける所」の意味するものについて、これまでいくつもの意見が出され、議論が行われてきている。それらの意見を整理し、それぞれに私見を加えてみたい。鷲只雄氏が従来の諸説を要領よく整理して（註②）有効であると思われるので、それらに鷲氏自身の説を加えた五点を採り上げる。

①議論の起りとなつた教科書の設問に、指導書類が与えた「人間の欠如」、あるいは「愛の欠如」という答え。

②関良一氏はこれを批判し、「作品に書いてないのだから、わからないうい、書いてないことを読み取ろうとするのは危険である」、<sup>③</sup>「強いて言えば、詩に没入する、詩人になり切る、そういうところが欠けている点」と述べている（註③）。

③ それに対し木村一信氏は、「書いてないのだから、わからない」と言

つてしまふより、袁俊が、どこと指示はできなくとも李徴の「詩」に「欠ける所」を感じとつたということこそ重要である。すなわち、中島は、自己の文学における何らかの「乏しさ」そのものの存在を語りたかつたのである。自分の文学には「欠ける所」があるのではないかとの「狼疾記」以来の不充足の思いが、ここにはつきりとみてとれる。

「欠ける所」についての詮索より、人間存在への「懷疑」といったテーマにも連なるところの、中島の自ら「執着」する文学へのあくなき（自己批評）の一つの在り様をみる視点を、「山月記」理解につけ加えてもよいように思う。——と反論する（注4）。

④ また、勝又浩氏は、それを「貧窮に堪へず、妻子の衣食のために遂に節を屈して」働きに出た「気の弱さ、信念の弱さ」であるとし、「本当は詩の鬼」にならなければならなかつたのだとしている（注5）。

⑤ さらに、鷺只雄氏は、以上の代表的な諸説をいずれも問題を含むとして退け、次のような自説を提示した。李徴の詩を聞いた袁俊の感嘆は絶讃と言つてよく、これ程の非凡の才能をもつた詩人がどうして有名にならなかつたのだろうという疑問が起こつてくる。しかし、それに対して作品は何も答えてはいない。ここに作者にとつてぬきさしならない大きな問題がある。矛盾の同時存在である。この矛盾の同時存在をどう解決するか、辻褄をいかに合わせるかという難問が作者に課せられた大きな問題であり、この解決をめぐつて提出されたのが「欠ける所」だつた。「欠ける所」は何かということの問題にする必要はなく、これは読者を納得させるための工夫であり、その内容は作者も意識していないのであろう。——というのが氏の意見である。

以上五点に加え、門倉正二氏がその他の諸氏から出された解釈として自説を含めいくつか紹介している（注6）中から、右の五説と異なると思われる三つの意見を採り上げたい。

⑥ 李徴詩における欠如とは詩魂の欠如である。詩魂こそ詩人の条件であ

り、人を感動させるものである。「格調高雅、意趣卓逸」は詩の絶対条件とはいえない。（伊藤雅子氏）

⑦ 対世間的な名声に拘泥することが本当の文学に到達できなかった理由ではないか。（神谷忠孝氏）

⑧ 芸術家にとって必須の条件である「刻苦」の不足や、才能を「専一に磨く」ことの怠りが作品に反映したもの。李徴にとってその性情の否定という努力（刻苦）が必要だつたはずである。詩が普遍性を獲得する（一流になる）ためには、その素質がいかにすぐれていても生のままの表出でよいはずがない。芸術作品が自己表現であるといつても必ずどこかに自己否定の契機がひそんでいるだろうし、ましてや個性とか自我とかが絶対視されることのなかつた唐代であれば、かなりに徹底的な自己否定が必要であつたと考えられる。袁俊に微妙な欠如感として感じられるのは当然であらう。（門倉氏）

以上の八説について、これより私見を述べてみたい。

① については、文学と倫理を結びつけることの問題点、つまり、人間性が立派であることが詩人たる絶対的条件ではないこと、そして、作品冒頭に「妻子の衣食のために遂に節を屈して、云々」と記されていることなどにより、李徴に「人間性」や「愛」が欠如していたと考えるには無理があると思われ、鷺只同様否定したい。

②の「作品に書いてないのだから、わからない」という見解は、作品そのものに即した次元での正しさはあるのであろうが、この部分の非常に曖昧な含みのある表現の仕方には、恐らく作者の強い思いが込められているはずであり、そうだからこそ多くの読者が看過できずに議論を行つてきたのだという思いから、この作品や作者に関心を持つ者にとつてはそう簡単には投げ出すことのできない問題なのである。また、関氏が、「強いて言えば」と留保をつけた上で「詩に没入する、詩人になり切る、そういうところが欠けている点」と述べていることについても、鷺氏が言うように、では全身全霊をうちこめば一流の作品となることが保証されるのかという疑問から、賛成でき

ない。

③については、木村氏は、作者がここにおいて自己の文学における何らかの「乏しさ」そのものの存在を語ろうとしたのであって、「欠ける所」についての詮索は重要ではなく、作者の自ら「執着」する文学へのあくなき「自己批評」の一つの在り様をみるべきであると語っている点に対し、私は、「欠ける所」が中島の文学全般に関わるものという考えには賛成するが、その詮索が重要でないとは考えない。また、鷲氏が言うように、作品はそれ自身で完結した独自の秩序と論理と構造をもった世界であるという認識から、この作品の中においてその「詮索」が行われなければならないと考える。ただ、「欠ける所」の真に意味するものを解明するには、それに加えて作者の全作品及び作者の生涯等をも見る必要があると考えるので、その点においては、作品から出るべきでないとする鷲氏の意見に反対である。

④については、②の関氏の「強いて言えは」以下と同様、李徴が強気になり信念をもち鬼になればそれは保証されるのかという疑問が生じるとの鷲氏の反対意見に同調する。

⑤については、袁俊の李徴の詩に対する評価は「絶讃」であり、「欠ける所」のありかは詩そのものではないとする鷲氏の意見と私は同じ考えを持つものである。だが、作者は非凡の才能が世に認められないという矛盾を解消し、辻褄をあわせるために「欠ける所」を用意した、それは、その矛盾の解消が難問であったため苦心した末に案出されたもので、そのために、「何処か」、「非常に微妙な点に於て」、「あるのではないか」のような漠然とした表現が生まれたのだ、つまり、「欠ける所」は、非凡の才能をもった詩人がどうして有名にならなかつたのかという疑問を解決するために作者が苦心の未用いた表現上のテクニクであつて、実体などない、とする主張には与することはできない。そうであるとするならば、中島は中身の無いもの、答えのない問いを作品に作り出したことになり、それはこの作品の完成度を著しく損なうことになる。私はそれは否定したい。また、非凡の才能が世に認められないのは矛盾だというが、その才能の世の中への問い方、世の中の受け

入れ態勢、時流、その才能を世に送り込もうとする協力者等々のさまざまな要因が整つて初めて「世に出る」のであつて、非凡の才が埋もれたまま一生を終えることは決してなく、作者中島が袁俊に語らせた李徴の中の何らかの欠損を意味しているのであり、漠然とした表現になつた理由は、「欠ける所」のありかが詩そのものの中になんか他の、ある事情が関係しているとは私は考えている。後述したい。

⑥に関しては二つの点で疑問を持つ。まず、詩魂が欠如していたという点について。「詩魂」とは、詩を作りたくなる気持ちや詩に対する情熱という意味を表すと思うが、「人と交を絶つてひたすら詩作に耽り、詩家としての名を死後百年に遺そうとした」李徴に、そういう気持ちや情熱がなかつた、あるいは弱かつたとはいえないのではなからうか。「詩魂」が、関氏や勝又氏がいうような「詩人になりきる」、「詩の鬼になる」という意味を持つとすれば、それについての見解は既に述べたとおりである。また、氏は、李徴の詩が感動を与えていないために詩の条件が整わず、作品として成り立っていないかの如く述べているが、私は、鷲氏がいうように袁俊は李徴の詩を絶讃しているのであつて、その絶讃には「感動」も含められ、作品そのものに欠陥を認めているのではないと考える。仮に李徴の詩が氏のいうように詩としての絶対条件を欠くものであるなら、その欠損点は明確なはずであり、袁俊は「漠然と」した感じ方などしないのではなからうか。

⑦の説は、「欠ける所」の因を対世間的な名声への拘泥に求めるものである。「詩家としての名を死後百年に遺そうとした」、「己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれていた様を夢に見る」などに込められた李徴の思いには確かに対世間的な名声への拘泥、名譽欲といえるようなものがあつたかもしれない。しかし、李徴にとつて自分の生きた証、自己の存在証明ともいうべき詩が世間に評価され後世に残っていくことへの願望は、正當かつ自然なものといえるのであつて、李徴の場合のそれが果たして「拘泥」といえるのか疑問である。彼の中のそのような願望、夢が、「欠ける所」を生み出したと

は考えにくいと思われる。

⑧について。李徴の述懐にあるように、己れの性情を正しく制御したり才能を専一に磨いたりするための努力を怠つたことが詩に反映し、それを袁修が微妙な欠如感として感じたのだとするのであるが、私は李徴の自己批判の内容(自分で述べる彼の生きざま)がその言葉どおりであるとは考えないし、そのことが李徴の詩に反映しているとも思わない。繰り返すが、私は「欠ける所」は李徴の作品自体にはないと考えるので、この説を支持することができない。氏の、「芸術作品には徹底的な自己否定が必要」との主張については、むしろ、李徴はその要素を色濃く持つていたと考えられるのではないだろうか。

以上、「欠ける所」についての諸説をとりあげ、それぞれに対する反論と私自身の考えの方向性を示した。鷲氏や門倉氏によつて諸説がまとめられた後も、各氏が「山月記」研究の中でこの問題に触れ、ここで採りあげたものと同様の考えや独自の意見を提出しているが(注8)、正面切つて論じているものはほとんど見られず、この難問を避けて通ろうとしているかのような印象を受けてしまうのである。その論じられようは、何れもが明解な根拠に基かぬ、説得力を欠くものといわざるを得ない。なぜなら、「欠ける所」を詩そのものに求める意見については、その詩が絶讃されていることの矛盾に言及せず、李徴に求める意見については、袁修が「詩」に感じたこととされていることとの整合性を問うていないからである。それはまさに、李徴と袁修を別人格と見るることによつて思考停止が引き起こされている状況といつてもいいように私には思われる。

さて、「欠ける所」を探るにあつて次に行いたいのは、「山月記」とその典拠である「人虎伝」との比較である。中島は、「人虎伝」に材を得て新たな文学創造を成したわけであるが、自らのモチーフを生かすために「人虎伝」からのかんりの改変を行っている。原典の何を消し去り何を加えたのか。そのことは、本論文のテーマである「李徴の詩に欠ける所の探究」に深く関わるものと思われ、その改変のありようを詳しく見ることによつて中島

の意図をくみ取り、論考に役立てていきたい。なお、ここにおいては濱川勝彦氏と木村一信氏の論考(注9)を参考にさせていただいた。

### 三、「人虎伝」からの主な変更点とその考察

「山月記」の骨組みは唐の李景亮の撰した「人虎伝」から得ていて、中島が依拠したのは「唐代叢書」(「唐人説書」)系のものといわれている。その「人虎伝」には袁修が李徴の詩に「欠ける所」を感じる箇所はなく、その他にもいくつかの「山月記」との相違点が見られる。その主な変更点を挙げると、一点目は李徴の性格と周辺の人物の変更。二点目は李徴に詩人としての執念を与えたこと。三点目は李徴の心理描写の詳細化。四点目は変身の原因。五点目は袁修への依頼の順序変更。そして、六点目は後日談の削除である。

以上の変更点の中で、二点目と四点目が特に重要であると思われる。詩人を志す人物設定をなしたことで、自己の内なる性情を「飼いふとらせる」ことによつて変身の原因としたことの二点は、原典との比較において明瞭となるどころの作品造型のモチーフといえる。したがつて、作品の主題はこの二点を重要視するところから導き出されるであろう。中島が李徴像に自分自身を重ねたことは間違いないが、彼は「人虎伝」にさまざまな改変を加えることを通じてより深い自己探求と自己の文学の創造を行い、それが「山月記」となつて結実したのである。李徴の詩に「欠ける所」を附加したことは、その自己探求と文学創造の過程において生じた必然であつたに違いない。「欠ける所」の探究は、中島のその営みの中で彼が最も思いを込めたであろう右の二箇所の改変点を中心に見ていく必要があると思われる。これよりその二点について考察したい。

まず、二点目を詳しく見るために「山月記」における主人公の状況設定をみてみたい。作品の冒頭部分、第一段落には、主人公李徴の境遇とその中で苦悶、それと同時に李徴が虎に変身するに至るまでのプロセスが語られている。わずかに十数行のこの部分には、虎と化す以前の李徴の人生のあらまし

が凝縮され、後に李徴が旧友袁俊に述懐する変身の原因と深く関わっていて、重要な意味を持つプロローグとなっている。そして、この序章には、見逃すことのできない作品の背景もしくは根底を成す部分が語られていると考えられるのである。

李徴は、「博学才穎」、「若くして名を虎榜に連ね」る俊才であり、「性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしな」い人物である。李徴のこの人物設定は「人虎伝」とほぼ同じであるのだが、「人虎伝」にある「才を恃んで倨傲」という部分の「才」に、中島は素材にはない詩人としての才能を附加した。すなわち、「詩家としての名を死後百年に遺そう」とする李徴像を創り出したのである。中島は原典の「徴、少くして博学、善く文を属す」に自分を重ね、文学を志す己れの姿を投影しようとしたのであろう。そして、主人公の詩人たらんとする悲痛なまでの願いに、自分自身の自己実現への願望、あるいは夢といったものを強く込めたのではないだろうか。その造型は、中島にとつては必然であったと思われる。ところが、文学に特別な才能を与えられた李徴による、己れの自尊心を満足させるための文学における成功という自己実現への道には、大きな困難が待ち受けていたのである。妻子ある彼には、文学における成功と実生活の遂行という課題が与えられるのだが、自尊心のために「賤吏に甘んずるを潔しと」しない彼は、現実生活と折り合いがつけられず、職を辞し詩作に専念しても「文名は容易に揚がら」ないのである。「人虎伝」には、「博学、善く文を属す」という「才」はあるにしても、その才能によって自己実現を図るために現実と衝突をおこすことはない。

そのような李徴を待ち受けていたものは「絶望」であった。それは、彼に与えられた二つの課題を克服できなかったことによる挫折感の原因である。つまり、官吏としての挫折と詩人としての挫折である。「賤吏に甘んずるを潔しと」しないために官吏が勤められなかった李徴は、一般生活者としての挫折感を味わったであろうし、官吏を辞し専ら詩人を志したにもかかわらず「文名は容易に揚がらず、生活は日を逐うて苦しくな」ったため、「遂に節

を屈し」た彼が味わった挫折感は察するに余りあるほどのものであつたらう。そして、「ふたたび一地方官吏の職を奉ずることにな」り、「昔、鈍物として齒牙にもかけなかつた連中の下命を拝さねばならぬ」事態に陥ってしまった李徴の自尊心は、以前にもまして傷つけられることになるのである。彼は「快々として樂まず、狂悖の性は愈々抑え難くな」るのだが、この「狂悖の性」には彼の詩人としての挫折感が深く根を下ろし、また、現実生活においてのみならず自ら恃みとするところの詩の道においても、己れの拠つて立つところ、自己の存在を意義づけるべき場を失つてしまった絶望感が含まれているのである。

李徴が虎と化すまでの助走としての役割を担うこの第一段落には、以上のような状況設定がなされているのであるが、この状況の設定は、「人虎伝」のそれと比べ強烈な真实性を持つていて、李徴が虎に変身するという荒唐無稽な怪異譚を讀者が抵抗なく受け入れるための必然性、リアリティを獲得し得ていると思われる。すなわち、詩家として名を成そうとした男が、その思いを一向に遂げられず、妻子のために節を屈して再び賤吏となり、鈍物の下命を拝さねばならなくなるが、非常なる自信家であつて片意地で他人と同調しない性格の彼の自尊心は耐え難いほどに傷つけられ、その生活を続けることは苦痛以外のなにもでもなくなつていく。その男の生きる道は、自分の夢に見切りをつけ、与えられた仕事の中にやりがい求めたり、家族への愛を第一として平凡な日常の生活に喜びを見いだしたり、あるいは現実の厳しさを知つて妥協して生きていったりすることではなく、ただひたすら詩作に打ち込み、その作品が世に認められることで自己実現することしかなかったのである。その唯一の生きる道が閉ざされてしまった彼の心は「狂悖」へ向かい、そして、第二段落以降で語られる「人間性喪失」すなわち「虎への変身」へ行き着くのである。我々は、中島によるこの作品造型に人間的眞実を見、怪異譚世界を突き抜けて心をとらえられてしまう。また、その男に作者中島を重ね合わせることによって、より一層の眞実味を感じるのである。

次に、四点目の李徴に語らせる変身の原因について見ていきたい。右に見

たような状況設定を背景として李徴の述懐があるのだが、そこにおいて彼は、「発狂」そして「虎への変貌」の因を何に求めているのだろうか。李徴が「どうして今の身となるに至ったか」について述べた部分は作品中三箇所ある。第一は、次の言葉である。「自分は初め眼を信じなかつた。次に、之は夢に違いないと考えた。(中略) どうしても夢でないかと悟らねばならなかつた時、自分は呆然とした。そうして懼れた。全く、どんな事でも起こり得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろうか。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」。第二は、右の「人虎伝」からの変更点の四視点の所で引用した場面である。第三は、「本当は、先ず、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を氣にかけている様な男だから、こんな獣に身を墮すのだ」という言葉である。この三箇所のそれぞれに検討を加え、どこに李徴の本音が述べられており、また、中島の真意がいかに込められているのかを探りたい。

第一の述懐について。この部分は原典にはなく中島自身の創意によるものである。しかも、この問題が彼にとつてただならぬ関心事であつたことは、他のいくつかの作品の中に同様の問題が提出されているのを見れば明らかである。すなわち、右に引用した李徴の述懐には、人間存在の不確かさに対する懷疑や懼れが込められていて、「かめれおん日記」の「証明の変化と共に舞台の感じがまるで一変するように、世界は、ほんのスイッチの一ひねりで、そういう幸福な(?)世界ともなり得るし、又同じ一ひねりで、荒冷たる救いのないものともなる。」という一節、あるいは、「狼疾記」の「彼の周囲のものは氣を付けて見れば見る程、不確かな存在に思われてならなかつた。それが今ある如くあらねばならぬ理由が何処にあるか?」、「彼は何時も、会体の知れない不快と不安とを以て、人間の自由意志の働き得る範圍の狭さ(或いは無さ)を思わない訳にいかない」等の表現と相通するものである。作者中島の問題意識からして、李徴に自己の変身の原因としてまずこの点を

脳裏に浮かべさせたことは極めて自然なことと思われる。

ところが、そのような李徴の懷疑や懼れは、「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ」という諦念に変わっていく。李徴は、自分の身に起こつた虎への変身という恐るべき事実を訳が分からないながらも、さだめとして受け入れるのである。それは、中島が、一人の詩人に人間でなくなる(人間性の完全なる喪失)という絶対に抗うことのできない運命を与え、極限的状况を創り出すことによつてその男の人生をより鮮明に浮かび上がらせようとしたことを意味するのではないだろうか。李徴はその絶対的条件の中で恐怖におのきなながらも、これまでの人生を振り返つて凝視し、生き方や自分自身についての激しい総括を展開することになるのである。

次に、第二の述懐である。李徴は、「何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない」と、確信はなくともその因を自分の中に見出そうとする。これは、「己れの生き方を振り返る中で、その因に相当するものが自分の内部にあつたのではと考えざるを得ない辛い心情を表したものである。この部分は特に素材からかけ離れていて、中島の意図が強く込められた場面であると思われる。

李徴は、「思い当ること」として自分の「性情」を挙げるわけだが、その性情は「臆病な自尊心」、「尊大な羞恥心」と二通りの表現であらわされている。「努めて人との交わりを避け」、詩人を志しながらも「進んで師に就いたり」しなかつたこと、「俗物の間に伍することも潔ししなかつた」こと、「共に」この「性情」の所為だという。その結果として「臆病な自尊心」を「飼ひふとらせる」ことになつてしまい、「尊大な羞恥心」が「猛獣」であつたと悔やむのである。この「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」とは同義で用いられている(註)と考えられるのであつて、中島は、「臆病」と「自尊心」、「尊大」と「羞恥心」という対立する語の組み合わせによつて、李徴のバランスを失つた自我を表現したのであろう。李徴は、「他者」の視線に身をさらすことによつて内面のバランスを失う。人々の己れに対する「偏

傲だ、尊大だとい」う視線を前にして、「傷つき易い内心」を持つ彼は、「誰も理解して呉れな」い苦しみを抱えるのである。自意識過剰ゆえの傷つきやすさを持ち、「己れを肯定する強さを持たない彼は、バランスを欠いた自我を制御することができず、その状態に耐えきれなくなっていく。そのことに前述した二つの挫折という要因が深く関わり、事態をより深刻化させるのである。「憤悶と慙志」の日々を送る中で、彼は詩人としての自己に絶望し、自分の拠って立つところを失っていく。そして、絶望感が拡大するにしたがつてバランスを欠いた自我も肥大していき、「性情」を「飼いふとらせる」ことがますます進むのである。つまり、「自尊心」、「羞恥心」という性情そのものが悪いのではなく、彼の他者への関わり方によって自我がバランスを失い、その結果、「臆病な自尊心」、「尊大な羞恥心」という厄介な性情が生まれて、それを拡大させてしまったことが不幸の因になったというのである。

最後に、第三の述懐についてである。前に原典との比較で見たように、「人虎伝」が詩の伝録を依頼する前に妻子のことにふれてゐるのに対し、「山月記」では、詩の伝録を終えた後はじめて妻子のことを口にす。そして、そのような自分の「非人間性」を李徴は「自嘲的な調子」で批判するのである。中島が原典の順序を変更した理由は、李徴がそれほどまでに「己の乏しい詩業の方を氣にかけて」いたことを示すためであり、衰憊に詩の伝録を依頼する時の、「作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着した所のもの、一部なりとも後代へ伝えたいでは、死んでも死に切れないのだ」という彼の執念の形象化のための操作と思われる。李徴の詩に対する執着は、人間として詩人としての自己が滅びることへの恐れゆえによりいっそう強いものになったであろう。ところで、「飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を氣にかけている様な男だから、こんな猥に身を墮すのだ」と李徴はいうが、彼は「非人間性」の持ち主などではないと私は考える。なぜなら、彼は「貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈し」たような男であつて、己れの詩業のことのみ考えそれに没頭しきる生き方などしていないからである。この第三の述懐は、

自意識過剰ゆえの自嘲癖、反省癖を持ち、詩に激しく執着しながらも一途に没頭しきれなかつた李徴の性格を示す役割を果たすものであると考えられる。以上の三箇所の述懐の意味を改めて考えると、第一の箇所において、虎と化す（詩人として人間としての自分がなくなる）という苛酷な運命が絶対的な条件として主人公李徴に与えられ、そのことによつて照射される彼の人生や内面についての自己反省を自嘲的に語つたのが第二、第三の箇所であるといえる。また、改変点の二点目と重なり合うのもこの二つの箇所であつて、ここに作者の最も述べたかつたことが書かれてゐると思われるのである。私は、「欠ける所」は李徴の中にあるという仮説を繰り返して述べてきたが、もしそうであるとすれば、その答えは第二、第三の箇所にこそ求められるはずである。これよりその検証を行い、さらに、答えそのものを見つけ出していきたい。そして、曖昧さの原因もつきとめたいと思う。

#### 四、「欠ける所」とは何か

私は、この謎を解くカギは二つあつて、それは、李徴の詩の中にあり衰憊が感じたとされている「欠ける所」の在りかとそれを感じる主体とを突き崩し、真の在りかと主体を明らかにすることにありと思つてゐる。

最初に、「欠ける所」の在りかの問題について考えたい。衰憊に「欠ける所」を感じさせた李徴の詩は、一方で、衰憊をして「格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の非凡を思わせる」と「感嘆」させ、「作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない」と感じさせてゐる。多くの論者は、「格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の非凡を思わせる」と作品の出来が表現されてゐることを軽視して、「しかし、この儘では、第一流の作品となるのは、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか」という部分のみに執着し、その矛盾に目を向けることなく詩そのものの欠陥を認めてしまつてゐるように思われる。衰憊によつて為された李徴の詩の評価には、明らかな矛盾がある。繰り返しになるが、「格調高雅、意趣卓逸、一読して

作者の非凡を思わせる」という「感嘆」は感動をも含む絶讃といえるのである。しかも、その思いには「欠ける所」の感じられ方の曖昧さが微塵もない。我々読者は、李徴の詩がそのような出来であると示されている以上、作品そのものの「欠ける所」を「山月記」のどこにも見出せないのである。「欠ける所」が詩そのものに存在しないとすれば、作者である李徴にそれを求めざるを得ない。中島は、その李徴に、第二、第三の述懐で己れの性情や生き方考え方の中にある問題点について執拗かつ詳細に語らせている。そこに明示されない「欠ける所」が否定的に述べられる李徴の性情や生き方考え方の中にあるのだという中島の意図が見取れるのではなからうか。すなわち、「欠ける所」の真の在りかは李徴という人間なのであって、李徴自身の中にあるものを作品中に存在させようとしたことが曖昧さの一因と考えられるのである。

次に、「欠ける所」を感じる主体の問題である。中島は、袁俊に「欠ける所」を感じさせるのであるが、袁俊が李徴の性情や生き方考え方に欠陥を見出さざるを得ないような作品の流れはここまでにない。かつての交際の中で、「性、狷介、自ら恃む所頗る厚く」、「峻峭」で「友人の少」い、「自嘲癖」のある李徴の性格は知つていても、李徴に対する友情にあふれる袁俊が、それでもって微妙だが致命的な欠陥を李徴に見出す（感じる）ことには無理があると思われる。「欠ける所」を感じる主体が他のものであるのに、袁俊としたことによっても曖昧さが生じているのではないだろうか。それではない、

真の主体は何なのか。私は、それは李徴自身であると考ええる。その根拠は、「山月記」が李徴の語りを中心としたモノローグと考えられる（注10）ことである。「山月記」の袁俊は、陰影を欠いた極めて自立性の乏しい存在である。中島は、「人虎伝」における袁俊の人物描写や会話を極力削り、李徴と別れからの後日談もばつさり切つて切つている。李徴が完全に虎と化し、李徴の人間が消え去ると同時に、袁俊も「山月記」の物語世界から姿を消すのである。「人虎伝」と比べ、李徴の比重が大きくなるのと反比例して、袁俊の

人物造型は弱くなり実在感を欠いてしまつてゐる。袁俊という人物は、聞き手あるいは李徴の述懐の導き出し役としての存在でしかなく、わずかに友情から李徴の語りに耳を傾け、詩の伝録等の依頼に応じ、李徴の詩およびその才能についての感想を抱くのみである。李徴と袁俊の二人は対話の形をとつてはいるが、二人が影響を及ぼし合つたり対立したりすることによつてドラマが展開することは決してない。これらのことは、この物語がモノローグであることの証左ではなからうか。「山月記」は、李徴による自己完結性を持った、虚偽を含まぬモノローグ（注11）と捉えることができる。つまり、袁俊という人物は、主人公の友人であり聞き手であるという役割が与えられながら、内実は主人公の中に存在するもう一人の自分として描かれていると見られるのである。「博学才穎」で「若くして名を虎榜に連ね」、「江南尉に補せられた」李徴に条件が整えば「監察御史」という社会的地位を得る道もあり得ただろう。また、「妻子のために節を屈」し、「彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らつて戴けるならば、自分にとつて、恩俸、之に過ぎたるは莫い。」と袁俊との別れの前に切望する李徴に、袁俊の持つ優しさ、人間味がなかつたとはいえない。袁俊が、「超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪もうとしなかつた」のも、「哀しく聞」くのも、「涙を泛べ」るのも、もう一人の自分の姿を見、その語りに耳を傾けているからではないだろうか。そして、李徴が語る第二の部分の中の言葉、「丁度、人間だつた頃、己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかつたように」（傍点・吉村）は、袁俊という人物が李徴の中の存在であつて、李徴の外側に理解者、友人などいなかったことの証明であると思われる。以上のようなことからこの物語のモノローグ性が明らかとなり、袁俊が感じた「欠ける所」は李徴自身の思いということになると思ふのである。

「欠ける所」というのは、李徴が自分自身の中にある否定的な側面を述べたものであるとしたが、そうであるとすると、他人である袁俊にそれを語らせようとした場合、李徴の内面や生きざまの実相は他人には分からないのだから明示し得ないし、さらに、李徴の詩に接しての思いであることから「欠



ける所」が詩の中にある体をとることになるのだが、「格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかり」と絶讃させた詩に欠陥を加えることになったために曖昧さの度合いがいつそう増して、「漠然と」、「どこか（非常に微妙な点において）」、「あるのではないか」という、不明瞭さを畳みかけるような表現になつたと考えられるのである。

それでは、実質的にはモノローグであるこの「山月記」において、袁倬という人物が創り出されることによつて何が生まれているのだろうか。まず、前述したように、物語の主要なテーマが込められる李徴の語りを袁倬が導き出す働きをする。次に、「袁倬は、この超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪もうとしなかった」とあることで、読者がこの怪異譚を受け入れるにあつての抵抗感の軽減を図り得る。第三に、袁倬に李徴という人間やその作品への思いを語らせる（抱かせる）ことによつて、李徴自身の語りの補完が実現でき、さらには李徴像に客観性が付与できる。特に、この三項目が重要であると思われる。李徴は、その述懐で、自分の才能に対する自信と自分自身に対する自信のなさ、換言すれば自己愛と自己嫌悪、自己肯定と自己否定という、自分の心の中の二つの対極にある側面を語つていられることができるのであるが、前者については、わずかに「勿論、曾ての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かつたとは云わない」とあるのみで、あとはすべて後者である。つまり、李徴の語りは、自分についての否定的な側面が圧倒的に多く、肯定的な側面が充分語られていないということになる。そこで、袁倬を通して李徴の語りへの補填が行われるのである。それはこういうことになる。「格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである」、「作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない」という表現で李徴の中の自信を、「欠ける所」、「自嘲癖」という言葉で李徴が延々と語る自己の否定的側面を、それぞれ端的に示している。結局、この物語は、ダイアローグの形をとつていても、袁倬がもう一人の李徴として造型され、その実はモノローグであるというからくりが仕込まれていて、そのことが、「欠ける所」とは何かの問題が容易に見えない要因と

なつていられると思われるのである。

以上のことから、「欠ける所」は李徴の語りの中、それも第二、第三の述懐における自分自身の否定的な側面の中の客観性の高い点に求めることになるのだが、その答えは、ここにおいて自ずと明確になつてきたといえるであろう。ただ、ここで注意したいことは、この作品において、比較的客観的な表現で描かれている李徴の姿や内面と、李徴自身の告白におけるそれらの表現との間にズレが見られる（注）ことである。李徴が語る「刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ」という自責の言葉は、冒頭の叙述「ひたすら詩作に耽つた」と違つているし、袁倬に頼む妻子の生活の事が詩の伝録の依頼より後になつた事に対して、「本当は、先ず、此の事の方を先にお願ひすべきだったのだ、己が人間だったなら、飢え凍えようとすする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけている様な男だから、こんな獣に身を墮すのだ」と自分の非人間性を責め苛むが、これまでに見たような客観的描写や袁倬の李徴に対する好意等からは、李徴に非人間性を見ることはできない。そのような自己に対する実態以上に厳しい見方は、彼の持つ自嘲癖が生み出したものであるとともに、詩人として名を成さんとしながら果たし得なかつた非達成感が、彼に自己を「怠惰」と捉えさせたためであり、過去を振り返つて激しい自己糾弾を行う今に至つても、自分の中に妻子への愛を凌駕する詩への執念が存在する事実を「断罪」したためであろう。したがつて、そのような自嘲による客観的描写と齟齬のある部分を除いた彼の持つ問題点が、これまで追究してきた「欠ける所」の答えということになるのではなからうか。それは、次のとおりである。彼は、憶病な自尊心（尊大な羞恥心）という性情のために人との交わりを避け、詩によつて名を成すことを願ひながら、師に就いたり詩友と切磋琢磨したりしなかつた。そして、次第に世と離れ、人と遠ざかり、願ひも叶わぬために憤悶と慙恚が生まれ、益々内なる憶病な自尊心を飼ふとらせてしまったこと。ここでの「憶病な自尊心（尊大な羞恥心）」という逆説的な言辭は、既述したようにバランスを失つた自我を意味し、それは、李徴が生来持つていた自尊心や羞恥心、言い換えれば自意識

の強さや傷つきやすい繊細さが社会との関わり（彼に対する非難や無関心、才能を認めないことなど）の中でバランスを失いながら負の方向に拡大していき、己れを肯定できない彼は、その自我のアンバランスを抑えきれなくなつていったことを表しているであろう。中島は、そういう李微の生のありようを彼自身に語らせ、またもう一人の李微である袁偉にも「欠ける所」として感じさせた。そういう方法によつて、李微の生の中にあつた問題点を浮き彫りにしていると思うのである。

以上、「山月記」に用意された「欠ける所」の答えにたどり着いたわけであるが、その意味するものをもう少し深く追究してみようと思う。

優れた才能と詩人として名を成さんとの夢を持ち、家庭を営むことも含めて通常の社会生活を送ろうとした李微が、どうして自己を破綻させてしまつたのか。彼の持つ才能が、人間としての彼自身とともに正常に育ち開花していくことを阻んだものは何だつたのか。それは、家族など顧みずに一切を抛つて詩業に没頭しきる非情さや非人間性などでももちろんなく、また、生来の狷介で峻峭な性情や、自尊心や羞恥心そのものでもない。述懐の第二に語られる、自己破綻の過程で見られた、彼の性情の負の方向への拡大をなさしめたものは、自信のなさに起因する自己への過度の執着、自意識への囚われだつたのではないだろうか。自己への関心、自己追究は、自分自身の長所短所あるいは心のありようを正しく捉え、それをそのまま自分自身として受け入れて、それが自己反省、向上心等を生み出し、前向きな生への意欲や行動力、さらなる自信、健全なる自己愛へとつながっていくものでなければならぬ。そうであつてこそ、自尊心や羞恥心は人間にとつての不可欠な要素として正常に育てられ、生きる力の推進役ともなる。ところが、李微は、自分自身を対象化して自己を正しく認識したり受け入れたりすることなく、「自嘲癖」が彼の持病の如く述べられてるように、自己の負の面を拡大して捉え、執拗な自己批判を繰り返すのである。その行為の生まれる源は自己愛や自己への関心なのであるが、決して健全なものではない。それは、真の自己愛や自尊心を育まず、自分を痛めつけ誇りや自信を失わせ、生きる力

を奪うものである。李微には、自分に健全なる関心を持たせ、バランスよく性情を発育させて生きる力や自信を与え、自己実現に向けての原動力となるような真の自己愛が欠如していたのではないだろうか。そのことが、自意識への囚われからの解放を阻み、自分や周りの者を不幸に至らしめたのだ。真の自己愛に裏打ちされた自信や羞恥心を持つて自分や周りの者を大切に、夢に向かつて突き進む生き方（行動性の獲得）ができていれば、虎となることもなく、彼の詩に「何か」が加わつて世の人々による彼の才能の正しい評価が為され、彼は更に揺るぎない自尊心を育て得たかもしれないと思われるのである。

ところで、「山月記」にはもう一つ大きな問題点の指摘がある。それは、虎への変身の原因を生きもののさだめと考える宿命論（存在論）と、自己の性情を野放しにしたためだとする因果論とが作品の中に並存するように見え、矛盾するのではないかということである。その問題も、これまで述べてきたように、原因に関しては、李微に絶対的条件として与えられた「さだめ」として決着し、因果論については、真の原因というよりそう考えざるを得ないほどの李微の中の問題点（「欠ける所」）が語られたものとするることによつて解決するのではないだろうか。私には、変身に必然を見てその客観的な原因を探ろうとする従来からの議論は不毛と思われる。なぜなら、誰でも虎になり得、因果応報的にその理由を特定することが可能な「人虎伝」の世界と異なり、「近代小説」である「山月記」においては、虎への変身を李微の語りを導き出すための装置と見るべきであり、また、象徴と捉えるのが妥当と考えるからである。

##### 五、おわりに

李微の変身の原因を探ることが研究の中心となり、「欠ける所」と絡めてその因を李微の人間としての欠陥に求め、彼を倫理的に裁断しようとするこれまでの傾向を批判する声が高い<sup>13)</sup>。「欠ける所」を李微の「問題性」に

見出した私の見解は、そのような解釈の枠組みによって彼を「裁断」したものではない。それは、新たな手法を用いての「欠ける所」の追究が、極限状況におけるすさまじい自己凝視によって浮き彫りにされた「人間李徴の真実」を導き出した結果といえるのである。また、近年の「山月記」研究が、内容中心の主題主義的な読み方から、語りの構造や表現方法といった「外枠」に注目する読みへとシフトする中で、「内容」を読み取ることにこだわったともいえる。この論考は、図らずも、作品構造の裏に秘められたからくりをあばきだそうとすることによって「語りの特質」に言及するものとなった。私は、哀慘という人物は李徴という主人公に吸収されてその実体を失い、李徴の語る自己の欠けたる点と自尊心とをよりクローズアップさせる存在としての役割を担っているのであって、その作品世界は実質的なモノローグであると規定した。だが、私のその見解が正しいとするなら、ダイアローグの方法が採られることによつて「欠ける所」が矛盾をはらむ形で提出されることになつてしまつたこの作品の完成度の問題は、たとえ「欠ける所」の答えが作品内に用意されていたとしても解消するものではないだろう。「山月記」の文学作品としての魅力と価値はゆるがぬものと思われるが、その完成度については問われなければならないのではあるまいか。私は「山月記」のその問題性の因つてくるところは、「欠ける所」をテーマとする中島文学の全貌を見渡すことによつて明らかになると考えている。

- 注1、鷗只雄『中島教論——「狼疾」の方法——』（有精堂、平成二年五月）、門倉正二「山月記」を読む——作品と教材論——《まとも》（言語と文芸）昭和六三年九月。
- 注2、注1の鷗只『中島教論』。
- 注3、『ギリシャ的叙情詩』と『山月記』について（言語と文芸）昭和四十年九月。
- 注4、『中島教論』（双文社、昭和六一年二月）。
- 注5、『SPIRIT中島教』（有精堂、昭和五九年七月）。
- 注6、注1の門倉氏『山月記』を読む。
- 注7、主なもの挙げておく。

松村良「エクリチュールの復讐——中島教『山月記』——」（昭和文学研究）平成六年二月）、丹藤博文「教材『山月記』を読み直す」（読書科学）平成十一年十

月）、柳沢浩哉・森田真吾『山月記』の修辭的分析——「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の修辭とその狙い——（人文科教育研究）平成十二年八月）は、関氏と同様に「書いれないのでわからない」との立場をとっている。

夢沼正美『山月記』論——自己劇化としての語り——（国語国文研究）平成十二年十二月）は、李徴の詩に「言葉を語ることへの脆弱な認識が表現されてしまつてい」とする。

前田角藏「自我幻想の裁き——『山月記』論——」（国語と国文学）平成五年十月）は、李徴の「詩人への内的動機」の欠如」であつたとする。

田中実（自閉）の咆哮——『山月記』——（日本文学）平成六年五月）は、李徴が「嘆きの中に身を任せ」たため「自己対象化の甘さ」が詩に現れてしまつたとする。

日置俊次『中島教『山月記』論』（東京医科歯科大学教養部研究紀要）平成九年三月）は、「不用意」という語を用いて李徴の詩作態度の問題点を指摘し、「口に出すままに作る」「酔う」ことがなかつたためにその詩が力を欠いたとする。

長谷川達哉『山月記』の言説分析の試み——人間李徴が失つたもの、虎／李徴がたどり着いたところ——（中央大学文学部紀要）平成十三年三月）は、当時詩人であるためには政治的地位が必要とされたとして、エリートの哀慘から見て李徴は「詩人たる資格に欠けていた」とする。

注8、濱川勝彦『中島教』（角川書店『鑑賞日本現代文学』昭和五七年一月）、木村一信『山月記論』（日本文学）昭和五十年四月）。

注9、柳沢浩哉氏・森田真吾両氏は、注7に挙げた論文で、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」には違いがあり、その使い分けには自己の自尊心を隠蔽し虎に変身した原因を対照的な羞恥心にすり替えるようとする李徴のたくらみが表れているとしている。興味深い分析であるが賛同できない。

注10 田中実氏は、注7に挙げた論文の中で「山月記」の構造に実質的なモノローグ性を見るが、それは語り手と表像が李徴の告白の中に吸収され弱体化したため対比化が妨げられ自立度が弱められたとする論から導き出されたものであり、表像をもう一人の李徴として見、それを論証しようとするものではない。また、その点を「山月記」の作品としての「統一」とする見方もない。山本欣司「後悔の深淵——『山月記』試論——」（日本文学）平成十年十二月）にも「李徴の語りモノローグ性もまた、『山月記』の構造が要求するものであり、「表像には、舞台上に陣取つた第一の観客というべき側面がある」との表現が見られるが、田中論文同様「山月記」モノローグ論を展開するものではない。

注11、夢沼正美氏は、その後の「山月記」研究に多大な影響を与えることになつた注7で採り上げた論文において、李徴の語りには「劇的な自分を演出するために、彼によつて仮構された言葉」であるとしてその真実性に疑義を唱え、李徴の悲劇は「自分が何を語っているのかもわからぬまま、虎になつていかなければならない」点にあると主張

したが、疑問を抱かざるを得ない。李徴の語りには確かに悲しみや悔恨の情の激しい  
ほどはしりが見られるし、「自嘲」のための必要以上の自己裁断によって実態とのズ  
レを生み出してもいるが、人間でなくなろうとする李徴の詩への情熱や自己の生き方  
に対する悔いの念には、やはり圧倒的な現実性を見るべきであると思われる。そうで  
あるからこそ、我々読者はこの作品世界に惹きつけられてきたのではなからうか。私  
は李徴の言葉に「演出」の企みも「虚偽」も見出すことはできない。

注12、夢沼氏はこのズレを、李徴による「自己劇化」によって生じたもの、彼の告白が  
「自らの過去を対象化するにふさわしい、正確な自己分析として語られ」ていないこ  
との現れであるとしている。

注13、山本欣司氏は注10で挙げた論文で、そのような「従来の『山月記』論が共通して  
構造化してきたのは、李徴排除の力学である」とし、それを断ち切るべきと主張して  
いる。